

「狂気の石」について

——十五～十七世紀オランダ、フランドル

地方の絵画に基づく一考察——

酒井明夫、三田俊夫、道又利、石渡隆司

マドリッドのプラド美術館には、ヒエロニムス・ボスの手になるとされる「石の切除手術」と題する板絵が展示されているが、この絵は、「頭を切開して石を取り出し、狂気を治す」手術を描いた多くの絵画のなかでも、もっとも古いものと言われている。狂気に対するこの治療法は、十五世紀から十八世紀にかけて、おもにオランダとフランドル地方で行われたとされ、この主題は、ピーター・ブリューゲル、ヤン・ステーンなどによっても取り上げられている。しかし、絵画以外で、この民間療法に言及した記録や文書が文献上で引用されたという事実がないことから、この「狂気の石の切除術」については、一、実際に行われ

た、二、まやかしであった、三、民衆の前で演じられる芝居であった、などさまざまな説がある。W. Schnuppach は、「狂気の石」を描いた絵は、それが意味するものによって、(一)フランドル地方で使われていた隠喩を表わすもの、(二)第一群の絵の題材を演じた芝居を描いたもの、(三)伝統的な「狂気の石」のテーマが新しい医療技術と組み合わされたテーマを持つもの、という三つの群に分けられると述べている。S.I. Gilman のように、『狂気の石の切除 (cutting of the stone of madness)』は正しい治療のイメージからかけ離れたものであり、狂気 (madness) は何らかの客観的、身体的原因に基づくと考えたがる人々を嘲笑したものである、と主張する人々もいるが、しかし、「狂気の石の切除」という図式には、たとえそれがネガティブに表現されているとしても、暗黙のうちに内在化されたイメージがある。それは、つぎの三点に要約される：一、「頭ないしは脳」は精神の座である、二、精神の病いは何らかの物質的なものによって引き起こされる、三、精神の病いは物質的原因の除去によって治癒する。このようなイメージは、狂気 (folie) が、頭に入り込んだ虫などによって引き

起こされるという考えは古代から存在したこと、また、十五世紀オランダでは、少し精神状態のおかしい人に対して、「彼女の頭には石がある Elle a une pierre dans tête.」
という言い回しが普通におこなわれていた (H. Meige) ということにも反映されている。「狂気の石の切除術」自体は（もし現実に行われていたとしても）、それが多くの絵画の題材に選ばれていた当時は、身体的な治療効果とは無関係で、もっぱら暗示を中心とする精神療法的効果を目的としていたと推定される (H. Brabant) のに対して、その

題材の背景となったイメージの展開、歴史的意味について考えると、初期には、風刺的に描かれた「狂気の石」の絵画が示すように、否定的な色彩が強かったものの、十九世紀に起こった、病気に対する解剖学的理解の促進と、解剖学的観点からの病気の分節化 (M. Foucault) 、精神疾患の器質的原因を主張する器質論者の台頭 (H. Ellenberger) 、身体的治療法の正当化と精神療法の否定 (J. Haslam) などの現象とともに、「精神疾患の身体的原因の同定—治療的介入（原因の除去）—治癒」というポジティブな器質論的モデルへと変容していったと考えられる。したがってオ

ランダ—フランドル絵画に描かれた「狂気の石」は、科学的観点で捉えれば、「狂気の原因という未知なる状態の視覚化」 (Gliman) にすぎないとしても、それは古代から人々の間で共有されてきたひそかなイメージ、やがてはグリンジャーの「精神病は脳病である」という言葉や、精神疾患に対するさまざまな身体療法の出現へとつながるイメージを体现しているのである。

(岩手医科大学)